五升菴文草 卷三

惟夢和尚反集卷第三目録

湖白菴記
水樹菴記
五鈍菴再興記
梅〻主の秋乃記
國分山幻住菴為歴〻石を建〻記
恒牛菴記
庵丁式拜見乃記
芭蕉堂供養頌文
梅壷塚供養願文
梅〻主一壺塚供養祭文
白根塚序文
唱塚頌文
山里塚供養文
梅中亭記
五鈍菴記
法可亭記

夕暮塚供養文
笠塚百回忌法楽文
故郷塚百回忌法楽文
石山寺奉納願文

湖白庵記

諸九尼需

世に隠人の住る所は洛陽深草の里とやいひて都に近き
うけのなかりけりしこの粟津の里は千鳥なく鴨の川
一すぢを隔てゝ去ことも遠からず何やかの百姓の
草の扉尼法師の竹の編戸門をさしてかの住る
風流の隠士の家とはしらざりけむ覚ゆるなりし推移
この地に風雅者造りしこの寄を遠く
あらひ待りし折まし又宜からしぞ集り
おのれのことしも見うつしくる今をかの名を好まし

あつめきし折ちかき比この里の南一町許の藪まで
かに誰住むとしもなくふるされ草庵を見
出たり前の人に問へばこの此なし何某といへ
る人の流れをくむきの形見しといひけるよしなりし
侍るに仰にまかせ侍るべくもなき風雅の話なすにつけて
既に昔ながらく庵しける年ごろ諸九の尼が都
ちかく住けるにこそ人まじはりもしたまひし湖白庵なりける
あはれ詠とも見えましなかばいひしもの皮ぬれいあまりしに
いともふく庵の柱など苔むしけり軒端の竹の蔦かか
るもあはれにて庵に入りたるその房いまこれを
見るに今の日ぞ山の方およそは広くまたは国分山の禅
床よりは結構なる西南の方も松の林に竹の林めぐりて
庭にはまがりなる椎の木陰多くまじはりく萩に蔦又椿
もしなきれし秋まつ頃に萩こそ竹の葉の前
持仏をまつりひ浮風居士が肖像をかけて湖白庵の三字を
額とし北の壁のかの毛筆一張を掛て傍にちいさき
机をかまへて硯文台の調度庵やうの草紙を並べ其
一室我ら折りたる折の時しも秋夕の景おぼゆる
所としてあはれ野の花の松をいくつも西に向ひて
わたしなる垣の外面に清水の流れ見えては都の人去

[illegible]の後あの雲のあてあくるみぬく年を忘れ
[illegible]作う林いとくくあの老木のあるに星谷の
清の流りし接舞滅しあくぬい五清の心入氷も消ぬし
春をあの葉を門畑の摘をもるようあ花を嶺入山を
白ひ月うめ雲う嶽よう名くうあくくしあるも雪の空
護院う長をうもよりをあ今うあ見ひやあれをくく山
林うきあくさるあれい雨うあ市中のちをくたるもあう
て月ものもておひあをかくひあき〻菴あしやをくう
世中れ神義をもつくしいくに見くくうのあくくも
あくに子きや氏あよくやくしに流をかくる方の白

あるくしく明和三年五月十七日庵入双のよし
もくあの芳紙くくあくに

椿中亭ア記

丹后百尾別荘

亭ア椿中くいくあ椿中くいくあゆ高を寄ひかく
あの亭うあくうよ客林ア樹多名れい椿中に基を
かくみく松ひア仙人のあくあくよ松くくあ世のくまあ
月を高の亭よくあくて月毛の苔をあけうよ詞入海の
加くき世くくあれ百代の度入をくあくく日月のをき
松楽くく天の移之の代景を四時のああとあをれい

壺中の天地の府庭なるべくもなく百味をそなへる廚もちかければ不断菓物の実をそなへ又かつひもなくて
きわや人間の外仙窟ともいふべし

人のきしぬ仙家めかなり冬こだち

氷樹菴記

筑前福岡梅珠別業

池邊別業是何人ぞと問へは梅珠といへる隠居なりとや
その庵を氷樹と名付しいかなれはそのさまを
いさゝか庵のかまへ町並あるべし此あたり市中の
市に隠るゝ大隠といふべきものなるへしめでたくもの
草木は栽さまも新端を思ひせず枝ぶりも庭深の仙家桃の
色みえて武陵の何かゝれ里に分入し思ひあり秋は垣
根に萩きらゝれ七種をならべ菊の百色は咲ほこり世
咲嫁深草の野に住しに似たり夏は池水すゞしく
谷茶をわかし冬はなほ鴨のうかれ無心を友とし
またよの俳の道にも疎からねは時にふれ氷に新をつくり
して花の月をさましめ末にしるを入まくは色相の
色を観じていにしへの他國の花を数ひ深浅の真を記
すもをかしめや

月と花菊と秋てつるに氷樹庵

五柳菴記

世の人うゐまるやをりを西りやを一所に居て
いひ蓮胤い月峰山の方丈と呼て文よ名あり長
竹ひち紙世ちうく背柳の居を長若し歸し
貞徳の家紙芦入九郎と名日しこと文義よ四方
学の柳おういうし されも古まいされ名あり人
先徳の上なれいなおしこ家よ市ちく世ひし
草入菴と人ケ号時の件の居年山入寄の尺しの
おうう天わの者こ者ちうう貞徳の月出世をこしる
せし時はのものれい人入うう人よ名もなく名あり

あのうもおうく天ひはうう人きの
うれうれとわの一家のかのれみ人行う名さ
先しとけひさうく当の年う病原ケ名よきの
伊賀人の相面居士の絵ちう居の付物よせ
うれうりや和年姫よ第五絵
ちつう芭蕉翁の紙毋をわ人ケ名よちやうれ
名入隠揺をまもの名ちも祢ケ翁よ詠をさけ
姫の名よ答よ紙くくよ第五絵入貧雨を
味をしもつうれまうく和年のおよわりうよ
をうくうう居を名ケ名ケ試ケの

祝よせて

浮世や現うゝ水よはよはと

五科寺再興の記

人間の衣食住の三つ欠ては叶はぬ事なれども
中にも衣食は住の基なれば住居きはまりなし
天子の禁闕御殿の事は言に及ばず三公九卿の
殿閣も檜皮葺の三つ葺四つ葺の優なるは宮入城
墨を瓦門石垣に上るまでもきはまりなし
國の守郡の吏に殺生の業を勧める僧侶
吉祥の山に立寺の瑞の龍の如くに聳えたる
神の宮は言に及ばず西の四と北と東の林の奥
深く花咲き実の成て諸の鳥囀り告るこれ
佛の法の精舎にていつれか上求菩提の位を得さ
きれば業苦の如く牛の歩きに百姓の家ゝ喧
騒の義聲の絶ずして商人の店ゝ一格の花り
手の拍ゝ宅門の法ゝ祿多
村翁の三味線の音かまびすく婦女の笑まてる
寺々の柱神の生ずるしまく枝枝の動くこと
天狗のやうに蜃の海の浪たゝん

鎌倉の途にて芋菊を孤蕨蕨に往入
初瀬にまゐらんとて見ぬ兎神に手向
鳥獣まで見ぬ行ぬ山あるべかりけるとて
一宇の梅あり
芋の海より至れば山の麓に一宇の廟にて
静かなる庵の侍りを作離茅舎詩人屋とはいふ
やうに寺にも家の庵にいかにいやしきものなれども
なほ世の人の住ものにしるみ
ましいつるに平七八年ぶりの也
きくらの岡詩の里さいうしろにかさう嶽を山の右に

神主岡方より義頂山あり山ぬしの嶮よまよ白
なるめぐ流しく都のあ芋をよ紀ぬ伊ら牛を
トーしてうみ家の門伊の塩にあて孫を容の塩
土ふよ七ふ七日吸孫の光やひ人ぬ見て
おのきく記ふの生家ふう出ふく相里百家の影えに
革の戸もりく一時の焼京にあう四講ふの灰牛と
まきに一夜やきふ今ふもあく
今も為に焼形に雑ふ成よきと
ふ鉄房ふ七まに塩形ふ山吹の石の物いふ
芋宮ふ孤り白やうあり一藪の伊に富の人ふけ

かゝと嘶くこゑ[illegible]の塔も義もなくまつゝ山路を雲も
ゆきかよひ
又こゝ[illegible]ゆくこゝろ落つくもあり
三界無安猶如火宅とは世の相行とゝきのゆむよりや今
よの住ふるさとまもるしあやこの草のきゝよひわすれ
ぬ四のさかりもよきすぎて夏も暮れい早苗とる民の
業ちゝゆゝしきも農夫の心ならひなれば思ひ出ぬ
住菴あつゝうわゝ物下石ゝ夜を明さしは
ぬよくゝれ夏ようゝれ夏を思ゝ思ゝ三伏の日
うゝしてかゝれ下樣下松のあれもゆゝしきも見ゆ

利ゝて住ゝ[illegible]ゝて念佛申ゝ四ゝ[illegible]
業をゝ[illegible]情あゝかゝて五月五日ちゝきし入行滝
佛の法見ゝ[illegible]

見の者に[illegible]みくのようゝわ[illegible]
千年を金にかゝぬまでを
ちゝれ世や流ゝゝ柳も有
ちゝいゝゝいゝて[illegible]やゝあひきしゝ信
[illegible]の法ゝ[illegible]ゝて[illegible]小野ゝ[illegible]
[illegible]の[illegible]ゝれる枝ゝ[illegible]ゝ枝ゝ[illegible]ゝ咲碑の
法ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

急角して八月十五日ふるさとの入巷に月をる料と
角出をつくりを建られい庵の月のうつりあく月の色
入るる影のうつりくして
今宵ふる月の宿りを成よきう
雄鹿の鞍の古枝をわきけく離ふるうち城あひよ
はるかに一をほりや菊の宗

休丁亭記

豊後杵築一幹別業

世の人入信れ家をいとまをまつる山の翁一幹を隠て
件を種蒔をかひく物の和歌世界しかの粉を

年を生ふれよ付て一幹のぬしへ官途の待の山川
うれを枝のうち静よ一宮よ出るうく出をやし
ものはうをまをまをしかの家入まをを世
殊よ茅稠影梅の孫播を平まれ寄瓦件籬入
酒蔵ふかくしれその家の吉うく十菊よ足うる
わうう小家のうをれよ芋の遥うう きうく浦の
うをれきれよわうう屋風をまいう山里のつれる
うれうを育なうう市町のやあれい吉の月をうる
くくうくく竹の吉を秋の松うれによくあくの
芝を厩をまうくく稼を容の初見をうう行をよ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

橋立の秋の記

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人〻那珂湊に宵を旅ほれやをきまれ小國日和
ひろみなきい出の名月の影を定まりいる
野人橋立の待宵の月をさしと人〻たづねられ
て那よりうつり掛の頃をとゝ漕めう切戸のほを
やすりて松よ那をはのきゝ月待ほの夕きゝ
花ゝ那ゝまうゝ多ゝや

待宵や夕月見里入飯きゝの
よ屋みる小をさるひを那ゝ面やほうゝ好き
那の遊びのゝ夕月の浦ゝ第明待
いるまハれゝ樣干上ゝ村つゝ足成せい与明の

海橋の杉を伐り出すとて、[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

名月や海に入れる金毘羅

橋の月を杉の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

夜の月のあはれなるを[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

國分山幻住庵再興碑建し記

いにしへ幻住庵の住侍りし幻住庵い石山の奥に[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

八幡宮のうしろ方なる方に寺のあり
ける所にその庵の跡のうきまれ生をかすかにて
遠く四方山をのぞく嶽墓所の里の細道をうる家
名所多くうえ南を岩間稀穂の山くまひ小せ
三上山を富士の伊吹のかすひ多れも日枝比叡の峯に加水
てうりの乳も幸減の和歌高砂の松尾の槙
まつめまつも皆多の格の格をわれも嶺とり新彩
面のりかつも雨と手ぶる嶽の名とまとまつも庵の跡
きすも移のうまる義多ましかの庵をいつの世に
やのかうかきし一つの格の格も新しひ三の往うの跡に

えをねいけるえに寄をきれる人あり、かの世を
形をそい先なのもしけるみ移りし推のまえ
いくあるうはうの物をうの事を推し
清水のまれ移をうしの谷陰のまれ下の
流るまい不成のほのまれ清毒移を書写堪を移し
移嶽をかいくの流ふ不の堆くおれるのを
をうやをかくまの四ひをを移つまれ同毒の地
かるまるうまををにくをれいかの宮守の
岩屋入始れ人をかるひてをの移ををひ
この嶺ふを狩を建しの四ひ一つの天神建

その庵の形をせるもしるしなれば後の
世まで堕涙の思ひのしるしにもなれかし
弘化二年九月十二日　幻阿陸佛
建之

松平菴記

湖東老人

ゝ一安永の秋の月うゝ秋の彼岸の後の
高木よりの時雨を樓を建て京くらの菴
ひとつの大名の御のひとりにきこえ
遥く半日の間を倫しらるゝ芦水里秋二人のすき
ものありけるとかのぬしにもとめられ
よりもの物うかまるの形をあらはされ車二輌ばかりなれ
はるのうゝくなれい菴城今の地よりみよりの
ゝれ千年遠仏ゝとゝく松平君ゝ友人のゝ
いかしゝうの菴の名ゝセあるしゝ常の行家より
遠ゝれ者ゝ道のゝゝあれい夕急ぬをいゝうゝ
ようゝかゝたまゝて二国のゝゝひゝきゝ京ゝも
ゝひたゝ世のゝとゝゝれゝ君ゝ者ゝ
書ゝけゝゝれゝゝの答ゝうけゝゝ書ゝれゝ

庵千式松之記

ゆゝしき禁中の儀式なれば殿上の
かの日も殿上の人々はまゐり日乗うゝしく
いそがるゝ中なれば侍四人して
さぶらはせたまふ中にもうち物衣を鶯
よりはつゝましく清らなる人のうちやうはゆゝ
ゆゑゆゑしい宮廷御所のもようの宋女正しきる人
なりけるかの方よりはしりおとをするよりはつ
やとしたる御衣をたてまつりて結ばせたまふ
いとゝきりゝしくかしこうれたるよ
解らしく人々も出でゝ御簾のうちにはしり

女房の衣のゝゝひきゝゝ殿上にあるとき
いゝきゝ日なかいとゝゝ又ゝ殿上あきられ
つゝまるゝまゝ朝夕又なれきる人なれいつゝ身の
上よりはゝかゝはとのうてやうなるあくて
なれいかゝふしなの身ともいられてあるゝやうし
ゝゝあるうちとやて義人して御方の
いゝゝゝかゝしまるて殿ゝゝ
三家の御ものゝ見わやあう

庭下よりかやくゝ春の日乗うの
舞楽を拝詳ようゝの賀屋も保楽の一ひひ

陰なる散るの恨しけるに枯るとかのこれ貴法を
あるやうなるなる城おのの[illegible]
ゆゆしくもひかれまるに[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

幻住庵のうれうまやの[illegible]

芭蕉堂供粮願文　施主名録集序

伏て[illegible]祖翁芭蕉翁生世の[illegible]
[illegible]浦[illegible]の[illegible]

庵をもとひ[illegible]幻住庵[illegible]
[illegible]禅寺山先好墓田の[illegible]
[illegible]
門人[illegible]
七年の冬十月十二日遷化の[illegible]
[illegible]
枯尾[illegible]
近[illegible]石碑の文字の[illegible]
年[illegible]
草津の[illegible]

今は誹道の一名區とはなれりされはいにしへの比より
世に行はるゝの一字の書なく維舟書を以て
祖翁の音像を安置しすなはち風雅を主として
人々に値遇の縁を結ハしめ侍りしか年月久しけれハ
新彫にせよとて殊さらに尊像を造りしかなくなりにたる
あまねく諸方の好士に告てかゝる新営をなさま
風雅の報恩に擬すへしとかゝるわさを思ひたち
侍るにさるの西国の風流の好士あまたされハ春や秋にも
金花さくみちのくの果より西は隼人の薩摩まて
まゐらせして布金の施主のあまた侍りて思ひけん

して土木の功をなされし新に鬼瓦のいらかしきを
始られ壁画に象鼻の巧をなせる繪様にて瓦檐にかゝる
ちりはめ路の玉河の萩すゝきをうつして前しめ棟木柱は
珊瑚琥珀の柱を立窓蔀は黒塗四方に花をまて
あらまし侍りていさゝかの結構をそへさせ祖翁の
まてよかなり此堂新堂のそれはおそれし常世の額は
三条の中納言の大和文字には有かたくも御園の筆を染て
堂は中の言の花月の際の文字は一字一字しくも芭蕉の
墨跡にそ写されたれ其祖堂の中にそなへ奉る
我しまくのをなされ東西の塔の上に数多の門人三千

六人の画像をこゝに彫刻し奉り
諸々の善根を願ひ奉るものなり
友よりの寄進の仲いたゞきて
こゝにいれ今月今日花も盛り月も満ちいるがごと
設け日のれいとして新寺院成の供養を修し侍る
大佛殿の供養を第四の法華経いまこゝにみまの
今ここに流布の連歌一千句を興行し一切諸国の旅人の
捧ぎる雑毋の交合なれば新あり縁まれい忽天に移る
花と文芸のごとく諸々の地に嬰ることれ鳥の音楽を執
業の時ここに供養をまれこゝに言葉い三昧の法

有て待語文字の業なりもゆゑ鳥の声に諸佛
事の因縁あるべきこのうえ生れい祖義の供養を
て納受し給はさしや市みう至誠を敬奉し給ふ
やし法門幻何弥陀佛教白明和七庚寅年三月十五日

橋之一色塚供養祭文　丹後東陌需

さて一夏のほとの夫の物之に芭蕉翁の碑造立の
事ありて是紙い山忠の文庫う南宗院の浦う人々
祖徳と言ひすりて風雅の餞を百年に傳し也
ありて塚の高さ六尺ありて石を三尺ほど碑の

雨ふる古墳の仕事入送迎を願ひむとの石碑伝銀の
式わるしとて主人に平城周脇師を迎へられきれり
思へばいろいろ嘆くその朴なるていと雲霧の義仲寺と
伝へる古廟と一抔の土城ひうけうけ昔よかきそ
ゆ国より下向日ばかりして今月今日碑字の法延を
ようけ奏ぜらしし貴ぜ黄ぜ紙諸入連歌一巻ぜ
御ひ一緒乳ていの寺の海れ潮をくを祝と入て慌を
知るの文を書く時を明和四丁亥年五月十二日樣美
謹ぜ巻ぜ読む情思へいむ一阿蒼像賜の辞ひて
杖篤象ほと渇を飛し次子明石杯を深め移のる

ものもこれ天の稽古の証みるの六千銀尓と似るを
なきし三景と教へ寺ぜ言れ移ひるよなるねる蔵の
陸ひを既辛く雪の変りを腰痛をぬる多病の身と
いるをしと思ひるまう移ひるうされいけ
稽ひを紀の加れ変白の一巻のを彷彿ぜしてまの
ものうちの切戸のうちうの風景よりかるひく
今も武蔵と称ひ人入の山寺ぜ新ぜるいかるれを
白を思ひるるも祖霊ぜ此ぜ吟ひ移ひるいるも
生涯ぜ此入住寺ぜ我義ぜきるるを思のや移
ひるるかうれ拾照をひ移ひけるめる管見を

[illegible]れもや百年後の今日よりうつして此碑面
[illegible]遺骨入社友四十二人打の一巻の力成
[illegible]ゆくゆく終に此塚をこの地に築きそ[illegible]
初春の一老媼[illegible]名付き遠く祖翁の此流を[illegible]
[illegible]の海上禅母の父孫生
[illegible]の清き江[illegible]
[illegible]の波の敷[illegible]
[illegible]の岸[illegible]
[illegible]
[illegible]

碑面の香茶西掃の如き[illegible]
[illegible]の一[illegible]
[illegible]の外の海[illegible]月の影も灯明[illegible]成
[illegible]の花[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

晴壷塚供養願文　播磨山李坊需

維時明和五年子冬十月十八日遺弟僧隨夢謹而芭蕉
翁青禪師の碑ぶ長跪して曰常て同元禄の比湖東
通明寺の李由祖翁の拾骨を埋て墓塚号し爾初
より二十余年その間紀月まち年よりしかして
昔の時手跡のそこなひ塚と違生の受の
筆墨のほれうるよいせ侍る時丙塚成業の類の図
しるしを塚に書るいま一基塚の数大凡三百ち
まり五十よまし〳〵しこの南天の八寸四千の塔を
刊墨をいたしたる徳光のあるなきしいたるまで
はるかに実不可思議のしるしられいこの明石の浦へ
まるもかしこ神詠のはるかに同じ〳〵ちの代の文人
跡宝此浦ちいたれとなり祖翁もかのうへの浦迦
葉ちしし変の夜れうれとあるしる法師
鴻の義ちも功成し明石の夜泊し新の
ちかに宝よ富士加古川の山李坊子の社中と勧進し
いまと不よ勒し晴壷塚いはるめまれ出ぬ
かの人うれ碧ちしるの碑を建し法を生るい碑を
所しに法と為ちしに為ちしに四ちるし子の地へ
さるを海はしるや入しに四ちるきまるし杉のちるし

柿本の宮居近きれい法の詩歌耳よりも仏法の香高
月よ仏くの霊祀あれいし地をとりてかの碑を建る
今日その神霊の志月あれいそして相感ふ〻〻仏法の千
身無尽〻〻みく神霊の既雅の冥加祈り返
〻〻祖者よ代流の酬恩〻〻絶くうしやや希〻〻
我門の仏法碑の文字〻〻すよ時〻〻あく変の日
の涼〻〻代流〻〻おひあしきを教白

倚中笠岡

嶋塚願文

世〻もけ〻よ宗祖の時面ぶし〻るよ人生の無常

親をあ〻〻よう其人の切拝毒教の脱切をあひ
法華法水の生涯よ〻〻かあや名称山よ打ま〻れ
法恵海よ打〻れの〻また務切に滅相をあ〻〻おる
遠よ世を〻〻〻〻打法の切〻〻や不毒思議の因
あ〻〻今〻〻いの〻〻山岸の吸江山〻〻法
乙養の先法蓮場入書院あ〻〻〻世の宗国を長く
先祖の好士十余軍を紀の迷詠の山岳入墨絵よ仏〻よ
刻〻れ〻〻石よ彫〻〻嶋塚〻名付き芭蕉翁の神魂と
変り〻〻〻紀亭と建く日吉の道場をかよ法
仏の本の法も〻〻百年を後よ〻〻て遠くこの

けゝ[illegible]紙[illegible]の[illegible]をはなれ[illegible]
[illegible]の時[illegible]石面[illegible]
[illegible]に[illegible]今や[illegible]の西
[illegible]眠[illegible]自[illegible]
[illegible]魂[illegible]文[illegible]
[illegible]前時[illegible]
[illegible]山[illegible]
[illegible]の一[illegible]
[illegible]

かの魂も[illegible]城山の[illegible]

白板塚序文

[illegible]国[illegible]弁[illegible]星[illegible]
[illegible]宋儒[illegible]
[illegible]紙[illegible]
[illegible]里[illegible]
[illegible]
[illegible]五[illegible]
[illegible]西[illegible]
[illegible]
[illegible]

苔のけいそよ

ひとつの碑をたてゝ

山里塚供養文　越智古壱造立

うき世を浮雲の後わすれ世界に箭塔数塔
卒塔婆建て佛恩報謝をいとなみ今の世
芭蕉翁の墓塚蓑々塚を築くもとゝ
月々に墨をそめ國々をわたりあるきも
あるべき雅の道うつくしくさに吉備の
国の奥田房の庄よりの道より俗伝の好士あり之

山里を等家ゝ古翁の愛句を思ひ
れ山里の去毎に思ひ出ゝ今更よきゝ笑
ゑれ物ゝ一行の石より加の名我刻て除り庵の庵の物の
木のもしに立ゝ山里塚と名よのゝ名夕西掃き
ゝ山雲の大社に詣るの道のわりもれ
帝釈山よりのりをもゝきくもゝの塚の
供養の導ひしあれ清ゝ立ゝ立ゝ
石ゝ立ゝ梅の花吟ゝ叫ゝ人ゝ
負ゝ立ゝ中ゝに一坐搭婆を建ゝ数のゝ
梅の花ゝ立ゝ雪ゝ雪ゝ墨ゝ雪ゝ

氷魂を招くかくしくもえある供養の日なりけれは
安永八年しきさらきの三月蝶夢幸のしるしをしるす

夕暮塚供養文　武州川越

そもそも仏入滅の後に四所に塔を建し中あり誕生処
得道処転法輪処涅槃所なりされは其弟子の比丘
の御徳を慕ひまゐらするに立離なくしけは
よりて後の世に其道の師とされし人の因ある地に碑を
立れなかりしられ縁によれるものの今もさかりし
麦林舎士いふなりしてさかし芭蕉翁の俳諧の祖と

受ゆく国々に俳諧の神代ゆかりて此道広め
あれり中にも関の東に其家の風を吹きされ人少
なからし行かし麦鴉老人も其一人なり此道をもて
とみ四つを巴のそらなるより武蔵の国日暮の里に
竹の庵に塚を築きて夕暮塚と名付しなとして其四許の
中に鶴法師子とかいふありしかし其塚供養の
如我世に此のきしもて集作りて始むるまのきよしいは
松のき近き年々頃は此月の更とてもなさらんとすれは
武蔵や年やむかふれしゆえかり八十に余れる人の
言れ其もよそ[illegible]おはしもあれれ云ふかり塚の発ちやれ

因縁我随喜しけつて遥に都の東山にありて　蝶夢
幻阿弥陀佛書

故翁塚百回忌法楽文　伊賀上野

むかし芭蕉翁はじめよしたゞ主は伊賀の国の何某侍い
おもむくおかしとや古集もおほくなるとし出青
反古し或草も伊賀の人々のなされおほかるは翁のなき
しりぞくなかりし許六も伊賀の風雅を天数のよし
されし翁のうつされ友なりしや其人なりそのいきれ
この国を都に比しけれし人ありし詠よいふ告けり

あまた都の人をえらびてちらぬ庵出の詩の文字もけふに至
花雲のうつの数の日本平安も秋のこと其数に詠
あるは男も女もよはされ女もなきとけにさえけれて
うわくに伊賀の国も風俗を詩文にさまへなる人を
きれやしつきまつる人を衆も老の友なるをきゝ
もちわやの道ひ翁の風土の仲恋なりし
けまも翁生世の門人ひも他の国よりはそれ其色と
うつしたるいとおもしきも風雅のこゝろ伝へ給い
此国の門人なりもし五十回忌の時は芳の門弟
おりくゑ其の里しに集まりしらぬまよりい

まていふ百回にあたりて旅のよゆかりの好士あまたし有て
俳諧蕉翁のすゝみし跡ひし操吟ありぬしよりも
四代にわたれる青吟のぬし追善の發句旅りしよ
蕉翁の善機不變淨院に其世の精業ある孫あれは
門人の手集ありまの一味の奥行あるも風雅の冥通に
むかしゆるして遠く翁の行居へ侍しても旅の跡を讃
にとみよ下向一巻不易物のうたれ今序事
をいたらおの我らくに毎しけきあひこしかのお古を
ますすくしまる我塔おにおもして書

笠塚百回忌法楽文

そもそも元禄九年湖東平田明照寺住職李由しみとい
芭蕉翁の門人のうち韻塞集の序文をこはれしかて曰
風雅の實体山野によりてくいましこ其の詩をさかりてそ
きわれしも故翁の笠をうしなひてやら西の楊貴妃
に詩て我の甲に入れまく其れをおもふかよは翁も
画像居をうしかりし西受口決の賞をも許されて常に
きこえ雲をしかしむうち行と寂しし誰と有てか労むしむ
嗚呼かなしむへし紙衣滅をこ三十年にも及べれこう

優婆鞠多を教導の沙とする事しかるべしやと
[illegible]
及ぶべきにあらざるもの
五蘊七道の國くに数の内化するに國もあり陸地の
集城多の数い湖南の栗庫文庫の棟にうつす庫
法道の半も伝きくされい事の由の元亨の紙砂藏
を三千年と号したいつくしん佛の説のる事法
第年寄教悪滅の語のごとく今の世さうなれも
伝ふるうつる方なるべきるの事なれも一家の勢移り
後に数の蓋城を埋く蓋塚名月の内俗

文選あり教ぬれ蕉翁の塚築るとめ公義伊さ
塚の記まもちるの辛田の事に蕉翁古ごとく
事ひく

百年のいにしへを今の家事のごとく
多く城移り移り変百の歌のごとの書の好みあ
る祥月のかのごとの事世のごとのう
ぬ古ものの事ひのく九月十二日いのく孔波をし
都よ伝の月をく老法伝を待ぬるやてを白
叩の寺にちるよ伝ひるの家よ古家の新像を安置し
如法一寺集城傾へるう一堂懐旧の百歌を興行

懐紙を堂塔の前よりなげて施主御法よりなし給ふ
日を寛政五年秋九月なりけり

石山寺奉燈願文

けふくわのれうまを思ひけるとやくより親世
家なりくわ科の寺よりみちの髪と剃
ちい出水うほよりなく夜を徹して堂塔をいとなみて
れはえさるもしきうかうの雪のうへ和をなりく
祈をと時うは加をに改をわうく仏理なわきむ
なく新しえ命れくなりなりくなりくなりて出家うかうとかて

世をうのはうをうしく行脚をもうけうて檀
那の門よりなくわうくなりなりくなりく嵐を
わうれ婦婦をうの初をうをうしく訪ねうく寺勢を
なりうれしとれく道法ゆうをていをうのなく日
訪をうを中をを世を見をいを寿をわうれを寿ををを
世を四をなくうを世の四をいをををををををを
まをうをしををををををををををををををををを
世和の平ををしをををををををををををををを
ををををいをををををををををををををををを
いをををををををををををををををををををを

古より世をまてはめくりよせしとかの
手に心をかきくおのけりし世無の吉に努き
伴にまでめしこ宮固の記しく及ま時を待へり
頃の明和の年の比信しし京都中川の坊を開きれ
信にけはり二十四ひしまりに東山円徳の菴に
まひうれぬ見これ千観の馬於のとなし理満の耻
かへしなれ陽れまかしまりしかれ世の為に
やふれ振舞をなしたる古徳の避行なりきても
やうなきい月景紙にすきむ心をはりてあのしまりの人
よもや葛の於しよくまつりのやまとすくまず候

二十年の春秋をとくまれていうに皆をそろしあかまとを信
せし縁誰にいかしり我子もわるれ名のいそきて思はれ
於の縁誰の名あれあめりはまわりてまきをとすするの
うるそう浅ましくきの三つ男はいかにゐる縁誰のおもうりをも
娘つるやめくよう縁誰の名をものあれしとさてましつて
齢を百とかの寸紙も紀国らしく塵厚くやう六根於を
行人六識うちまむとすあるさひうく於諸のある心
よい思ひしめて記しきへ罪障を懺悔しあまりも
行業の猶色なきし擁護をいのりたまひしと一つの
石をつて姿形をほりなく石山寺に奉る於くも

こうけの寺の敢世大士のけうけんをあらはしうち
をそれ山のかくさまるうんうそれ石うわやーき
まくれうそ清湖うみうれけうまーう寄宅蓮浄土を
うなきー雲もまれい代うの御門うの寺の跡かくも
わくを源為憲の蓮うの曙われい笠式アうのの
辺のもくーれかうれけうの今の世れ詩人歌人
山城海士ちちの心あきーも言詞けう言わけう
そうはれいわくんをあ有孫の伽藍をうけう
叩いはくんたれーをうはもうの妙用と仏表
ーをうその如義うこうるう九天わうう中央に

龍燈功徳経うの要偈の第人一帙奉龍仏得得服過前
無有量燈油硯如大海水甚妙猶如須弥山の文と好
文尚書博士中臣朝臣の筆なるのく石ーあうの好
ゐ文蟻爰行行法師の名をくむられを紙詩のあう
光をうれ形をうくい世をのきうの白い天明
五年五月廿日けくー空清くられ内をくー吟をうち
てをくに仏天を感應やーの名むく有りく世
うけくー文傳那うけう房けうをまくの作う妙明
仏表うを表白の文詩を納のとやかくに二なく叩
ーきれくけうをうれきのよあの無

やとの夏草深くなりにたるを見るにも昔の
事思ひ出でられて涙ぐまるるに式部が女の物語
源氏の面影いとあはれ
なり通夜一夏の夜のみじかさ思ひ出でらるる
書けるなり
五月やみ　うとき世の間よりきこえ出でたる
ほとゝぎす　四位少将
かつらぎ　山ほとゝぎす
石ばしる　滝の水かさまさりて　あいなくぬれ
ぬる袖かな　見奉れば
ほとゝぎす　光源氏
やきて　大将
ほとゝぎす　ほとゝぎす
まつ山かけて　なきわたれ　秀句なれば
きゝつる　見るらんと　秀句なれば
おぼえき　みちのくに
ゆかしき　室　蓋し
世の中　ほとゝぎす　雲も
花ちる　護摩　煙と
琴の音　五色の蓮の
谷うなる　堂の外
谷うなる　山の
世の物語　仏
はれぬる　法華経
ほとゝぎす　仏の
山の端　ほとゝぎす　暗
今ぞ　結　願を念誦する

ぬっぱけく　ものあれくに　ひとりほ付　為志の脈て
又ものそ　造てみし　地獄の石　苦しやまて
かくるきの　土うはうなる　ほくのの　雲かえひて
灯をしの　細ふ一ちわ　かくるも　世のいのあ
身ものう　仕四くそ　出るも　まつきこん
かくひかり　かのかりし　まこと詞を　うきたる物く
無始よりの　はるる苑い　やものこと　やるものら
かるるもも　曼陀の　やもしの　世到りまて
身なくの　周四ものく　まるこもも　心くひ
死ともみな　ものるる切極　はるうあき　はをかるし

ものもや　はるもはうく　生死あるよ　清浄世をく
ものもの　ものるる　ものはる　四の仏の　合十精堂
説はもも　見他於灯　仏心清浄　又七人よ
起随来心　身かるふ　性明を　百八ものく
極あくて　生るえみし　ありまし
ものこと　ものるるこも　廻向奉る

拾雪園

拾華花